バトらない？

弓塚 拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バトらない？

【Ｎコード】
Ｎ８９８７Ｙ

【作者名】
弓塚　拓

【あらすじ】
ちょっとおかしな少女が俺の家の前に落ちていた！？　そして、俺の平和な生活は終わりを告げる。

プロローグ（前書き）

妄想をフル活用しました。

プロローグ

どこかに可愛い女の子でも落ちていないだろうか。
男なら誰でも一度は思ったことはあるだろう。俺は毎日この希望をもって登校している。
だが一度も落ちていたことはなく、高1にもなってこんなことをしている自分に本気でどこかおかしいのではないか最近そう思うようになってきた。
それともこれが普通なのだろうか？
この疑問は誰にも聞けない。俺の心の奥底にある宝箱にしまいこみ誰にも見せないように鍵をかける。
こんな事以外は普通の高校生だ。
普通に暮らしていた。
だが数時間前その普通は音をたてて崩れさった。
可愛い女の子が家の前に落ちていたのだ。
今日は日曜でゲーセンに行こうと家を出たら落ちていた。つーか倒れていた。
「大丈夫か？」
俺は優しく声をかけた。だが返事がない。汗が頬をつたう。
俺は感付いてしまった。この少女は死んでいる。
俺やばくない？家の前に死体って。汗がさらに吹き出す。
警察を呼んだらいいのだろうか？それとも先に救急車？
携帯を持ちあたふたしていたらグーゥと腹の音が死体から聞こえた。
「お腹すいた」とても綺麗な声で言った。
生きていた。俺はうれしくなり泣きながら、どさくさにまぎれ少女に抱き付こうとした。
そしたら、右ストレートをくらい俺は1発KO。　ストレートがやたらに重く感じたのは気のせいだろうか？

気がつくとそこは俺の家だった。
頭が痛い。どおやら気を失っていたようだ。俺は起き上がり頭を振る。インスタントラーメンの匂いがした。
寝ていたソファーから立ち上がりキッチンへと向かう。足がふらふらする。
キッチンに入るとそこには、あの少女がいた。ラーメン食ってるし！
意味がわからない。どうしてこうなった。
少女は気にせず食ってるし！
俺は呆然と見守るしかなかった。少女はすごい勢いで食べている。がっついていなければ可愛い女の子だ。髪は茶髪で目はくりっとしている。胸は・・・・あえて言わないでおこう。
少女はラーメンを食べ終わると手を合わせた。なんと礼儀正しい。
そして、俺に近づいてくる。俺は生唾を飲み込む。
「あんた、私とタッグ組まない？」
は？たっぐ？なんのタッグ？
「えっと・・・何が？」
「これよ」
少女はポケットからくしゃくしゃになっている紙を取り出した。
〝フリーバトル大会開催〟と大きく見出しが書いてあった。
「フリーバトル大会？」
「ルールは簡単、二人でタッグを組んで行き当たりばったり勝負するの」
そんな大会あったんだ。まぁ俺には関係ないがな。バトルなんて興味無い。護身用に空手をやってたくらいだ。１ヶ月で止めたがな。
「優勝賞金は２５０万円だよ」　「ふ～んそうなんだ」
熱心に話ているが俺はまったく聞いちゃいない。だって勝手に人の家に入り込んできてフリーバトル大会だぁ。知るか！
「ところでもう帰っていただいてもよろしいでしょうか」

俺は女の子を無理やり追い出すような事はしない。ジェントルマンなのだから。レディーには優しい、当たり前だ。
「人の話聞いてた？私とタッグを組んでて言ったんだけど」
ちょっと怒っている。
「いや、名前も知らない相手が家に入り込んでタッグをて言っても組むわけ無いだろ」
「私の名前は麗」
「俺は崇・・・って名前を言っても組むわけねーよ！」
ちょっと怒鳴ってやった。びびって居なくなってくれればそれでいい。ジェントルマンとしては失格だけど。だが麗と名乗った少女は〃えっ出ないの！〃てな顔をしている。こっちが驚きだ。
「とにかく出ないの、そんな大会」
そう。と言って麗はうつむいて歩き始めた。
ちょっと可哀想なことしたかなと思う。怒鳴らなくてもよかった。
そんなことを思っていると麗は俺の前に来た。
なんだ？そう思った時にはもう麗の拳が俺の顔にヒットしていた。
本日2度目のKOだった。
そして、2度目の帰還。俺はいつの間にか真っ暗な路地裏にいた。
顔が痛い。俺は何故こんな所にいるのだろう？考える…思い当たる事が一つだけある。麗だ。俺は麗に顔面を殴られたのだ。
しかし、張本人の麗がいない。
すると近くから声がした。
俺は立ち上がり声のする方に向かう。なにやら祭りのようなテンションの声がする。
そこには、多くの大男と麗がいた。
ここから立ち去ろう。俺は気付かれぬよう後退りをする。
カラン
俺は空き缶を蹴ってしまった。
「ひぃ」
多くの大男に睨まれた。

「崇？」
麗がこっちに向ってくる。
「エントリー済んだから、えっと頑張ろ」
麗は言った。
「誰が参加するって言った！」
「まぁまぁ」
麗は暢気に言った。
「なんで暢気なんだ！大男と戦うんだぞこれから！」
「だって、」
麗は俺を見つめて言った。
「強い奴と戦うのってワクワクしない？」
麗は笑って言った。
その時俺は麗が可愛いく見えた。
「きっ今日だけな、どうせ俺に拒否権は無いんだろ」
麗はニコッと今日一番の笑顔を振り撒いた。
「抽選の結果第一試合目のカードが決まりました」
いきなり、男が言い出した。どうやらアイツは司会者らしい。
「まず崇&麗チーム、対して…木ノ原&菊池チーム」
「私達だ。行こっ」
「いきなりかよ」
麗は俺の腕を引っ張って大男の間をくぐり抜け戦場に向かった。
戦場に着き麗のテンションはマックスをむかえていた。
「さぁ、私達の相手は誰？」
麗は、はしゃいでいる。
「俺達だ」
ゴツい声が上から降ってきた。俺の前には周りの大男よりもさらに大きい男が立っていた。
「参りました―」
麗は叫んだ。
俺は全力で麗の頭を叩いた。

「痛いな～」
「いや、お前なに言ってるの」
麗は目を反らして、
「だって、恐いの」
「はっ？」
さっき、強い奴と戦うのってワクワクする、って言ってたよね。嫌がる俺を無理矢理連れて来たよね。今更、参りましたーって。まぁいいけどね俺は痛いの嫌いだし。
「参加者の途中棄権は認めません。」司会者が言った。
俺と麗は顔面蒼白になった。
カーン一、ゴングが鳴る。
俺達は大男を相手に立ち向かう。
麗は俺の後ろに隠れている。自分よりも弱い奴の後ろに隠れるって。まぁいい俺はジェントルマンだ。女の子が困っていたら無条件で助ける。
「俺に任せとけ」
俺はかっこよく言った。
「お前たちに俺の本気見せてやるよ」
校内マラソン１８位の実力をな。
俺はボクサーみたいにステップを踏む。
「さぁこいよ、ベイベー」
手でちょいちょいと挑発をする。
「なめんなよ」
めっちゃゴツい声。こえーよ。
大男の一人が加速して俺に向かってくる。一気に間合いを詰められた。大男の右ストレートが俺の顔に向かってくる。
「ひぃ」
俺は間抜けな声を出ししゃがんで交わした。
ふぅ？危なかったぜ。もう少しで俺の顔面にクリンヒットだった。
「ふごっ」

何か声？　がした。麗だ。俺がしゃがんだため大男の右ストレートが後ろに隠れていた麗の顔面にヒットしたのだ。

「麗」

麗は大の字で倒れていた。

「お前ら許さねー」

俺は頭にきて叫んだ。なぜ麗がこんな目に。

「お前のせいだろうが」

麗は起き上がり俺の顔面に右ストレートを放った。まさかの本日3度目のＫＯだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8987y/

バトらない？

2011年11月26日23時51分発行